

江戸の古今雛

もうすぐ雛まつり、桃の節句(上巳の節句)

です。最近の調査で、博物館に収蔵されている雛人形が、その作風から江戸時代後期に江戸でつくられた古今雛であることが分かりました。調査にご協力をいただいた聖徳大学の澤博昭さんの見解をもとに、ご紹介します。

文化の中心が次第に上方から江戸へと移った江戸時代後期に、それまで雛人形制作の中心地であった京都に代わって、江戸でも制作が盛んとなり、江戸オリジナルの雛人形が生み出されました。それが古今雛とよばれる雛人形で、二代目原舟月(1767?~1844)によって大成されました。古今という名称は、雛まつりの主人公である女性の基本的な教養に、書や琴とならんで「古今和歌集」が数えられていたことから連想されたようです。私たちが目にして現代の雛人形の多くは、この古今雛の流れをくんでいます。

古今雛の特徴となるのは、玉眼とよばれるガラスをはめた目や浮世絵風の江戸美人に仕立てた写実的な顔立ち、有職によらない装飾性に富む衣装などです。雛人形に玉眼を入れる技法を取り入れたのも二代目原舟月とされ、山車人形の技術を応用したようです。

山車人形も江戸で花開いた人形文化の一つに数えられるもので、二代目原舟月が活躍した時代はまさに江戸文化の爛熟期といえます。ちなみに当時の名工といわれる人形師は、雛人形だけではなく、山車人形・五月人形・

木彫の置物、さらには根付まで、客の求めに応じてさまざまなものを制作していました。

当館の古今雛も典型的な江戸製の雛人形です。江戸では原則8寸(約24cm)以上の高さの人は禁止でしたが、像高は約30cmもありまはなく木製で、オーダーメイドした高級品のようです。女雛の冠には、白色を中心とした瑠璃がさげられています。これも当時の江戸雛に多くみられる色使いだそうです。このような古今雛は、主に江戸の上層商人が購入したようです。

残念ながら当館の古今雛の詳しい来歴は不明ですが、土浦城下の商家が所有していた可能性が推測されます。同じく江戸時代後期の江戸好みの古今雛は中城町(現中央一丁目)の商家に残されており、まちかど蔵「大徳」で『第4回土浦の雛まつり』期間中にご覧いただけます。近世の土浦は江戸の文化的影響を強く受けた城下町でした。こうした江戸の雛人形が残されていることも、そのひとつの表れになるのかもしれませんが、これからの調査研究の進展が期待される分野です。

『第4回土浦の雛まつり』は、2月16日(土)3月3日(月)まで開催。まちかど蔵と周辺商店街、亀城プラザ、上高津貝塚ふるさと歴史の広場などを散策しながら、春の土浦を感じてみてはいかがでしょうか。博物館の江戸時代後期の古今雛は、平成19年度冬季展示の中で、3月3日(月)までご紹介しています(博物館は3月3日(月)、臨時開館します)。博物館では季節ごとに展示品を入れ替えながら、土浦の歴史と文化をご紹介します。

岡市立博物館 (☎824・2928)

